19. 食道離断術施行後の内視鏡的静脈瘤硬化療法の意義

田中 滋、中村 優夫、橋本 浩平
河原崎秀夫、岩中 督、金森 豊
（東京大学小児外科）

食道離断術を施行した小児門脈圧亢進症例のうち、
術後の再発静脈瘤に対する内視鏡的硬化療法施行例9例
について検討した。食道離断術施行例の43％を占める。
原疾患は肝前性門脈圧亢進症4例・胆道閉鎖症4例・肝炎
後肝硬変症1例である。硬化療法は原則として易出血
性の再発静脈瘤を適応とし、施行回数は1回から11回で
あった。一例に門脈静脈瘤硬化療法後の潰瘍の出血
をみたほかは大きな合併症はなかった。全例に静脈瘤
の縮小あるいは消失を認めており、食道離断術は門脈圧
が保持されるため静脈瘤の再発の可能性がある。

20. 小児食道静脈瘤硬化療法例

児玉 正、岡野 均
（京都府立医科大学第3内科）

松尾 健孝、古川 宣明、沢田 淳
（同小児科）

出口 英一、岩井 直純
（同小児疾患研究施設診療部外科第1部門）

食道静脈瘤硬化療法は手術療法に比し侵襲が少なく反
復して行える利点がある。このため小児に対する施行例
も増加しており、われわれも現在までに2例に施行し
た。1例は1歳10ヶ月男児で、吐血を主訴に来院。緊急内
視鏡検査にて食道静脈瘤からの出血と判断し、エトキシ
スカロールを用いた静脈瘤内硬化療法を施行、止血を得
た。以後再発療法を行わず静脈瘤の消失をみた。基礎に
肝前性門脈圧亢進症が考えられた。他の1例は8ヶ月の
先天性胆道閉鎖症の男児で、吐血時の緊急内視鏡で食道
静脈瘤出血を診断し前記と同方法にて硬化療法を施行し
止血した。

21. 内視鏡的上部消化管異物除去におけるフード付き
スライデングチューブの応用

大塚 弘友、野、彰和、清水 誠治
青木 美博、多田 正大
（京都第一赤十字病院第2内科）

症例は5歳の男児で、自宅にて遊び中に、大きさ30×
25mmの金属性玩具（過小）を誤飲した。7日間経過観
察されたが異物の排泄が認められず当院を紹介された。

22. 内視鏡的治療が奏功しなかった先天性食道狭窄症
の1例

○藤岡 毅、中田幸之介、金 義孝
石川 操、江本 朝明、桑原 幹夫
川口 文夫、山手 昇
（聖マリアンナ医科大学第3外科）

草野 幸次
（同臨床検査部内視鏡科）

症例は嘔吐が主訴の1歳の女児で、造影下、下部食道
1cm長の狭窄がみられ、内視鏡で pinhole 様の狭窄
を確認した。内視鏡的切開を中心に2ヶ月間の保存的療
法にて治療効果は得られず、最終的に食道部分切除を要
した。組織所見から気道原基説による食道狭窄と最終
診断した。下部では食道壁内の硬い軟骨組織のため内
視鏡的治療は困難であると考えられた。気管原基説
による食道狭窄症は、筋性維性肥厚によるものとの治
療前の鑑別が困難なため、治療法の選択に戸惑う症例が
多い。今回経験から、内視鏡的治療に抵抗がみられる
場合は、その限界をすみやかに察知し、手術等の確実な
治療へ移行することが重要であることを強調した。

23. Nd-YAG レーザーによる内視鏡下治療を行った
食道閉鎖症合併気管狭窄症の1例

平田 彰治、今泉 丁彦、宇津部元仁
田中 湯、小室 広昭

（155）

NII-Electronic Library Service